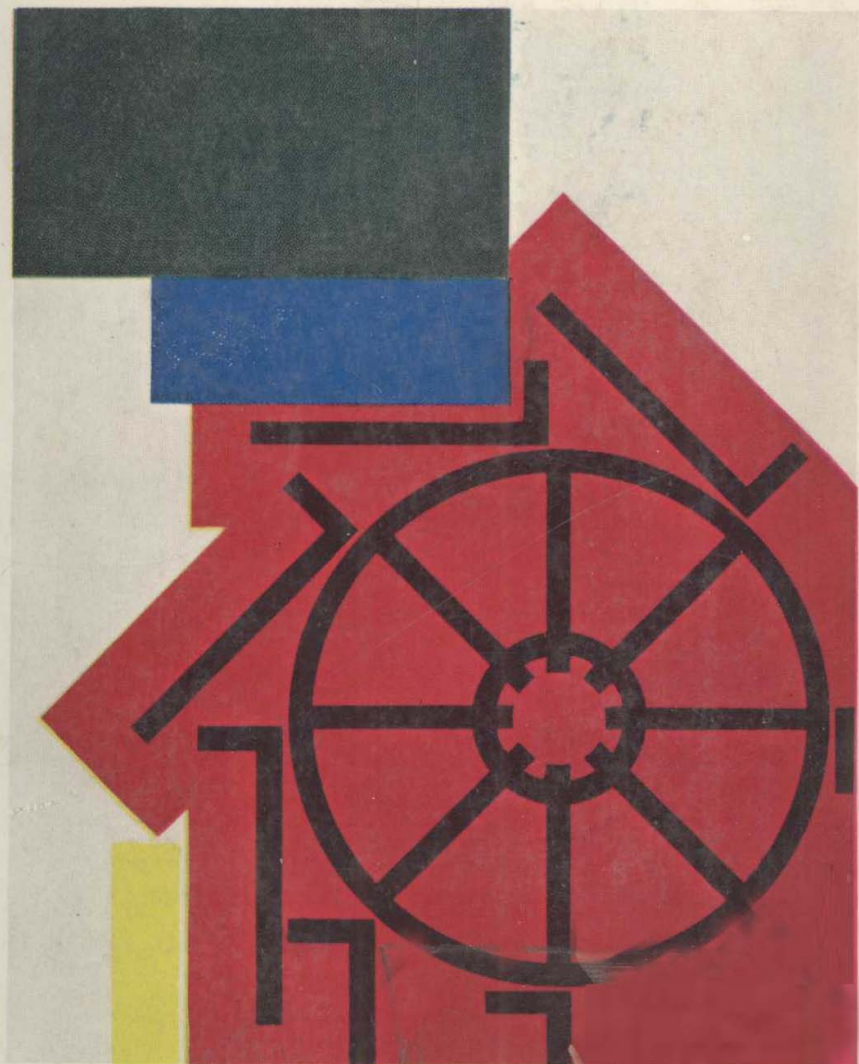


経済学入門 上

資本主義の原理と発展

長洲一二共著
正村公宏



長 洲 一 二
なが す かず じ

1919年 東京に生まれる
1944年 東京商大卒業
現 在 横浜国立大学経済学部教授
著 書 『現代マルクス主義論』(弘文堂)
『現代と資本主義』(日本評論社)ほか
現住所 鎌倉市郡村が崎5丁目33-7

正 村 公 宏
まさ ひろ とも ひろ

1931年 東京に生まれる
1959年 東京大学経済学部卒業
現 在 専修大学経済学部助教授
著 書 『現代日本経済論』(日本評論社)
『経済思想の革新』(NHKブックス)
『大型合併を告発する』(徳間書店, 共著)
現住所 府中市天神町4-1

経済学入門 上

1965年5月22日 第1版第1刷発行

1975年7月15日 第1版第10刷発行

著 者 © 長 洲 一 二
正 村 公 宏
1965年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 山 本 製 本 所

発 行 所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 東 京 (291) 3132~5番

振 替 東 京 84160番

郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 三一新書 478

1233-650478-2726

經 濟 學 入 門
(上)

長 洲 一 二 著
正 村 公 宏

三 一 書 房

目次

序章 経済学——その性質・方法・課題	セ
--------------------	---

I 資本主義

第一章 商品経済の原理	二六
1 資本主義と商品経済	二六
2 商品	三〇
3 労働と価値	三六
4 貨幣	四六
5 価格の変動	五六
6 商品経済の特徴	六七

第二章 資本主義の生産構造 (一) 三

1 資本 三

2 不変資本 六

3 可変資本と剰余価値 八

4 剰余価値の生産 九

5 資本主義社会の再生産 一〇

第三章 資本主義の生産構造 (二) 一三

1 利潤率 一三

2 平均利潤率 一九

3 流通費用と商業利潤 二〇

4 信用と利子 二三

5 地代 二六

6 国民所得 二六

第四章 資本主義の発展 二六

1	資本主義の成立	一六三
2	産業革命と労働者階級	一六九
3	景気循環と恐慌	一七六
4	資本主義の国際関係	一八一
5	労働運動の発展	一八九

II 独 占

第五章	独占資本主義の成立	一九一
-----	-----------	-----

1	独占形成の基礎	一九一
2	株式会社と資本の集中	二〇六
3	資本集中の諸形態	二二二
4	独占と競争	二三三

第六章	帝国主義	二五九
-----	------	-----

1	独占段階の国際関係	二五九
---	-----------	-----

2	資本輸出と植民地支配	二六
3	帝国主義国家	二七
4	帝国主義と社会主義	二五

第七章 独占資本主義の変容

1	一九二〇年代	二六
2	アメリカのトラスト	二九
3	ヨーロッパと日本の独占体	二八
4	独占資本主義の新しい傾向	二九
5	国際的な資本の結びつき	二六
6	大恐慌	三〇

〈下巻内容〉

III	現代の資本主義(第八、十一章)
IV	社会主義(第十二、十三章)

序章 經 済 学——その性質・方法・課題

經 済 学 の 課 題

人間はパンだけで生きるのではない。しかしまた、パンがなければ生きられないことも真実である。物質的な生活は、人間、その社会、その歴史にとって、十分条件ではないけれど、絶対的な必要条件である。政治、文化、そしてあらゆる歴史など、いっさいの人間の営みは、この物質的な生活を基礎にして、そのうえにきずかれる。

人間とその社会が物質的な生活を営み、さらに政治や文化などの生活を営むためには、まずそれに必要な物質的諸手段が、生産され、分配されなければならぬ。そのなかには、食料のよりに直接の消費にあてられる消費財もあろうし、機械や原材料のように将来の生産のためにもちいられる生産財もあろう。また有形の財貨だけでなく、無形のサービスもあるだろう。いずれにせよ、人間の欲望をみたし、社会の必要にこたえるさまざまな富が、人間の労働によって生産され、さらにひろく社会に分配されていくことが不可欠である。もしそれが停止したら、社会はただちに死滅し、人間の歴史は終わるであろう。

このような富の生産と分配が、どんな条件、どんなしくみでおこなわれているか、どんな運動をするか——一口に言って社会の経済的な運動法則——を研究するのが経済学の仕事である。

そこで、経済学の中身にはいるまえに、この「社会の経済的な運動法則」ということの意味を、もうすこし考えておこう。

社会科学として
の経済学

まず、経済法則は社会法則のひとつである。もともと、人間がひとりぼっちで生活することはありえない。経済学でも、学派によっては、孤島上のロビンソン物語を例に話しをはじめたものではないが、これは虚構にすぎない。人間はすべて、いつ、どこでも、社会的な存在である。社会のなかに生まれ、育ち、生き、そして死ぬ。社会をはなれて人間はない。政治も文化も、経済現象も、社会をつくって生きる人間の営み、すなわち社会現象にほかならない。

このような人間社会には、後述するように、ある客観的な法則がはたらいている。それを研究するのが社会科学の仕事である。社会科学はその研究対象とする社会現象の種類に応じて、政治学、法学、社会学など、いくつもの部門にわかれるが、経済学もまた社会科学の一部門である。経済学は、社会の経済現象、すなわち富の生産や分配の社会法則、言いかえれば人間社会の物質的生活条件を研究する。その意味で、社会科学のなかでもっとも基礎的な部門だといつてよい。

さきに、富の生産と分配と述べたが、分配はもちろん生産も、社会的なものである。人間はひとりで生産するのではなく、共同して、社会をつくって、生産しているのである。生産はかならず社会的生産であり、労働は社会的人間の活動である。中世の職人や農民のように、一見、

ひとりで生産をしているように見えるばあいがあつても、実はその背後には社会がある。

生産は、一面では、人間と物（自然）との関係である。人間が自然にどう働きかけ自然をどうつくりかえるか——これが生産の一面であるが、このように人対物の面から見た生産は、いわば技術学テクノロジの研究対象であつて、経済学は直接には取り扱わない。経済学は社会科学の一部門であるから、このような生産そのものを研究するのではない。人対物のなかにあらわれている人対人の社会関係が、経済学の研究対象である。技術の問題はもちろん経済学に深いかわりをもつが、それも技術が経済の在り方に影響するかぎりにおいてである。

奴隷の生産の背後には奴隷と奴隷主との人対人の社会関係がある。農奴がつくる米や麦は、農奴と領主の社会関係を反映している。現在の日本でつくられるテレビやシャツや乗用車は、人対物の技術学の成果であるとともに、資本主義的商品であつて、そこには資本と賃労働、企業と雇用者などの社会関係が凝結している。経済学は物の生産と分配にせめられている人間社会の法則を研究するのである。研究する対象はたんなる物ではなく（物Ⅱ自然そのものの法則を研究するのは自然科学だ）人と物の関係でもない。物をとおしてあらわれる人と人との関係である。

歴史科学とし
ての経済学

つぎに、経済法則は歴史法則でもある。経済学は歴史科学の一種である。

およそ社会現象がすべて歴史的な現象であることはいうまでもないであろう。富の生産と分配が、人対物の関係であるとともに人対人の社会関係であるといつても、それだけではまだあまりに一般論である。生産と分配という社会的な経済現象は、具

体的には、時代によってその形や意味がいちじるしく異なっている。

人間がまるごと売買される奴隷制のもとでの生産と分配では、奴隷と奴隷主との社会関係が主な研究対象となるだろう。封建制なら、農奴と領主の関係がそうであろう。資本主義の時代なら、資本家と労働者の関係になるであろう。生産手段が社会全体のものになっている社会主義社会ではまた、生産と分配の形も性質も意味も、資本主義とは質的にちがってこざるをえない。

われわれは、いま、資本主義の社会に生きている。もちろん、零細な農民や小売商のように、資本主義以前の形の経済活動を営んでいる部分もかなりあるが、日本経済全体の支配的な部分が資本主義であることは間違いない。非資本主義の部門も、支配的な資本主義部門の原則で大もとを規定されている。

ところで、こうした資本主義の社会というものは、けっして歴史とともに古いわけではない。いちばん早くからそれが発展した西欧のばあいでも、せいぜい数世紀、それが支配的になってから二世紀もたっていない。わが国では、まだ百年たらずの歴史しかない。すなわち資本主義は、人類史の上で、ある期間だけつづいている歴史的に特殊な一時期のことにすぎない。しかもそこでは、たとえばそれ以前の封建制の社会とは、まったく質的に違った原則が働いている。すなわち、資本主義は、人類史のある発展的段階で、生成し、発展し、支配的になった、いわゆる歴史的個体にほかならない。そしてこの歴史的個体は、それ独自の運動法則をもっている。

経済学が研究するのは、この歴史的に独自の経済法則なのである。これを、資本主義の体制法則とよんでおこう。

もちろん、経済法則のすべてが、資本主義体制だけに固有な歴史的なものではない。社会の生産にあたっては、どんな社会でも、社会全体の総労働を、各種の消費財か生産財に配分して、合理的な分業とバランスのしくみをうちたてねばならない。このような分業とバランスには、一定の法則がある。そしてこの法則そのものは、古代社会でも、中世の封建社会でも、資本主義でも、さらにまた社会主義でも、一様に作用するいわば超歴史的な普遍的法則である。さらに、たとえば商品と貨幣の一般的な経済法則のように、封建制から資本主義へ、社会主義へと、数個の体制にわたって存在し作用する経済法則もある。

しかし、どこまでも中心は、支配的な体制法則である。分業とバランスの法則のような超歴史的な法則も、商品経済の法則のような数個の体制にまたがる法則も、それぞれの体制の内部では、その体制の基本的な歴史法則に影響され規制されてはじめて、存在する。分業とバランスの型や意味、商品と貨幣の作用の型や意味も、資本主義のもとでは、封建制度や社会主義のばあいとは、違ったものとなる。

経済学の学派のなかには、資本主義の経済法則をなにか永久不変のものと考え、古代から未来永劫にいたるまで同じ原則で説明できるかのように説くものもある。これは、資本主義の歴史的な性格をわすれて、暗々裡にその永久不変性を前提した弁護論であると同時に、資本主義の

生成發展の歴史的な姿を見失う非科学的な見方といわねばならない。

この本では、どこまでも資本主義の歴史的な經濟法則を説明する。ただ、現代の世界は、資本主義の世界とならんで、これと原理を異にする社会主義の世界があり、これを考えずには現代世界を理解することができない。その意味で、資本主義の經濟法則の解明のなかで必要にうじて社会主義の原理にもふれ、とくにまた最後に社会主義の經濟法則そのものも考えることにする（下巻第四部）。

經濟法則の歴史性ということは、さらに同じ体制の内部、たとえば資本主義の内部でも考えておかなければならない。

發展段階

資本主義は、はじめ封建制のなかに生まれ、育ち、やがて封建制をくつがえして社会の支配的な体制となり、しだいに發展した。さらに資本主義の發展それ自体が、一方ではその成熟と変容を生みだすとともに、他方では資本主義の變革を目ざす社会主義の思想と運動をも生みだした。資本主義は、まず西欧に誕生し、やがて封建制の支配する世界をつぎつぎに變革して、世界を資本主義化した。そしてやがてこんにち見るように、世界の三分の一の地域に社会主義が成立している時代にまで変わってきた。すなわち資本主義それ自身も、生成、發展、成熟、そして消滅の歴史があるのである。資本主義の内部で、いくつかの歴史的な發展段階があるのである。

資本主義の歴史は、ふつう西欧のばあいを典型として、つぎのようないくつかの段階にわけ

られる。第一は、資本の成立（原始的蓄積）と重商主義の段階（イギリスでいえば大体一六〇一—一八世紀に当たる）。第二は、大工業の確立と自由競争的資本主義の段階。大体、一九世紀資本主義である。第三は、独占資本主義と帝國主義の段階。これが二〇世紀資本主義である。

資本と賃労働の關係を土台に、利潤追求を最高の動機とした商品の生産と分配（交換）という形でおこなわれるという、資本主義の一般的な体制法則は、これらすべての段階を通じて変わらない。いわば資本主義の本質は、一貫している。しかしまた、これら三つの基本段階ごとに、資本主義の實際の姿や構造は、かなり大きな変化と發展をみせている。いわば、資本主義の本質は変わらないけれど、それが實際にあらわれる形態は大きく変わっている。一般的な体制法則が實際にはたらく經濟のしくみや条件には、段階ごとに大きな變容があるのである。

われわれは、一般的な本質をはっきりつかむとともに、いたずらに不變の本質だけにしがみついてもならない。それはしばしば不毛な公式主義を生む。また反対に、各段階の特徴を正確に知ることが必要であると同時に、變化する形態だけに目をうばわれてもいけない。それはしばしば輕薄な修正主義をもたらす。不變の本質がいかに變化する形態のなかにあらわれているか、あるいは、不變の本質が、なぜ、どのようにして、變化する形態を生みださざるをえないかを、明らかにすることがたいせつである。そうしてはじめて、資本主義が、生成、發展、消滅のプロセスをとる歴史的な生きものとして、つかまれるだろう。

資本主義の一般法則が、いちばん純粹で近似的な形であらわれたのは、一九世紀中葉のころ

の西欧とくにイギリスの競争的資本主義の時代であった。以下この本でも、前半にあたる第一部（Ⅰ 資本主義）で一般法則を説明するにあいには、そのころの資本主義を頭において、ひとつの理論的なモデルを考えてみることにしよう。むろんわれわれは、一九世紀資本主義そのものを説明するのではない。研究目標は現代の資本主義である。ただ、現代の経済は複雑な要素がからみあっているから、それをすぐ取りあげては、かえってわかりにくい。現代資本主義の根底にある資本主義の体制法則一般をまずしっかりつかむために、比較的わかりやすい自由競争時代の理論モデルからはじめる方が便利なのである（第一部）。

しかし資本主義はその後、まさにこの資本主義の一般法則の作用によって、自由競争の段階から独占の段階へ発展し移行した。この段階になると、もう競争時代のモデルはそのままは通用しなくなる。技術や産業の性質も、資本の在り方も、また国際経済の関係も、市場や価格をめぐる競争の形も、大きく変わってくる。独占と帝国主義の支配の時代になってくる。この本の第二部（Ⅱ 独占）は、第一部で解明した一般法則のうえにたって、この一九世紀末から二〇世紀前半へかけての独占資本主義の経済法則を扱う。

さらに、一口に二〇世紀の独占段階といっても、前半までの時代と、現代とでは、資本主義そのものも、資本主義をとりまく世界的な生活環境も、かなり変化している。ほぼ一九三〇年代以降を移行期として、とくに第二次大戦後は、同じ独占資本主義の段階の内部で、国家の役割がきわめて重要な国家独占資本主義の時代になった。また資本主義は、東に人類の三分の一

をふくむ社会主義圏と対峙し、南では人類の半ばに近い旧植民地体制の全面的な解体期を迎えるという、新しい世界史の段階に当面した。こうして、現代資本主義は、資本主義全体の一般法則（第一部）だけでも、また独占の一般法則（第二部）だけでもつかみきれない、独特な姿と動きを見せるにいたっている。第三部（下巻、Ⅲ 現代の資本主義）は、第一、第二部で学んだ一般法則を土台にして、この現代資本主義を説明するのである。その意味ではまた、第一、第二部は、第三部のための基礎理論と考えてもいいであろう。

経済法則というばあいには考えるべき第三の点として、理論と現実の問題にふれて

おこう。

経済学を学ぶ最後の目標は、もちろん現実の経済、われわれのばあいなら、こんにちの日本経済を正確に理解することだ。しかし、そうはいっても、実際の日本経済の姿をそのまま理解しようとしても、それは不可能である。個々の経済現象は、毎日の新聞にもたくさん出ている。日常身の経験でも、無数にある。しかし、それらをいくら寄せ集めてみても、ただ雑然としたこま切れ知識の切抜帳ができるだけで、その相互のつながりも、因果関係もわからず、実は何も理解できないに等しい。

自然科学のばあいでも、たとえば実際にある水は、さまざまな不純物の混在したものである。H₂Oという純粋な形のものはないであろう。ただ、できるだけ偶然なのをとりのぞき、どの水ももつ共通で本質的な性質として、H₂Oという一般的な理論を探ぐり出し、それにも